毎月一回15日発行昭和52年7月15日発行・第90号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

少型テール

7月号



Cryof the People-Kim Chi Ha (民象の中かー シナ河) ジョーザノートン描く Libertire Vol., VIII. No. 8

無政府主義誌

昭和55年7月15日発行第90号 昭和45年9月4日第3種郵便物認可 リベルテール定価一〇〇円(郵便和

人類更生の大道アナキズム研究書

何が私をこうさせたか 金子ふみ子獄中手記決定版 2,400円 金子ふみ子歌集 解説:瀬戸内晴美 権藤成卿著作集2 農村自救論・日本農制史談 3,000円 大杉栄秘録〈増補〉 堀保子ほか19氏著 1,000円 無政府主義論 エンリコ・マラテスタ著 300円 ディナミック 石川三四郎個人紙復刻版 3.000円 アナキスト革命 ジョージ・パレット著 150円 西洋社会主義運動史 石川三四郎著 1,000円 ロシア革命の批判 A·ベルクマン著 200円 黑色青年 黑色青年連盟機関紙 大正15年創刊号 2,500円 より昭和6年終刊号まで復刻 黒色戦線 アナキズム文芸思想誌 第1次 昭和 5,000円 4年創刊号より終刊号まで復刻 労働運動 第5次 昭和2年復刊号より終刊号復刻〈近刊〉 差別とアナキズム/水平社とアナ・ボル抗争史 宮崎晃著 1.600円 権藤成卿著作集3 君民共治論 3,000円 マラテスタ著作集|無支配への道 アナキズムのABC ベルクマン著 100円 石川三四郎選集」古事記神話の新研究 2,200円 〈解説・石川三四郎論 大沢正道〉

〒372 群馬県伊勢崎市中町和田 電 0270-24-0776 郵便振替口座 宇都宮 11015 黒色戦線社 大島英三郎 東京事務所 電 03-735-1246

〒144 東京都大田区西蒲田 7 丁目61番8号エンリコビル4階 国鉄蒲田駅西口下車、蒲田銀座アーケード街歩いて 5 分突き 当り左隣、毎月第 2・第 4 日曜午後1時より4時共学読書会、初 心者に公開

販売書店/〈東京〉神田ウニタ・新宿模索舎・吉祥寺ウニタ・ 早稲田文献堂〈京都〉中区寺町二条上・三月書房

- リベルテール
- 1977年 7 月15日発行 Vol., VII No. 8
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190 萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替 東京133830番 三浦精一

世紀の誤審。死刑台のメロディ

処刑50年後、知事が無実宣言を別事が無実宣言を別している。 「主犯」サッコ、バンゼッティ、名誉回復 しの内では、対している。 「おいま」のは、対している。 「おいま」のは、対している。 「おいま」のは、

処刑50年後、知事が無実宣言

野

江

16



死刑の四カ月前に、歌中から家

二人の場合 工 ネル □岩佐 頭 # 言 5 太 資源の 郎 さん 問題 の場合 4

目

次

中国無政府主義試 海外だより 波万波 論 (4) 志 梅 大 田 Щ 達 子 勇 13 12 9

へ TEL 合 352 評 ど参集下 8月 会を 1 9日 六四七九 3 い 行 第 い 2火曜日に ます。 00 時間午 場所は新宿三光町月の輪 <二人の場 後6時~ 合> 8 時半 を 主題とし 版

3

to 0 2 0 ったの 挙 いの ゆる国 民保 の審判 7 0 夢も空 空しく相変らず自 口由 ッ党 キ が E らん 件か 政半 数 治 0 敗 VC 2 7 VC 慨 しな

4 在 分 い 5 2 0 に今の 75 ない して 度の 政 治 題 やかい 5 が体 る へだ 複制 で 雑へ 分け約 らだ 30 % な いし 0 カコ に投票して しこの の棄権が 中 VC 2 何 は 0 0 0 意 棄 味が 権 0 ある 中 0 VC 行 含ま カン P 7 れい 気 0 7 5 まじ 手 7 る 誰も 8 3 な批 す 2 0 最 判 ば 後的 VC あ 度 0 い げ \$ で T 含ま 棄権 た \$ のれで きる 0 る 止 0 宣 VC そ はそ 5 伝 を鵜呑 しだ いて -ろ現

迎合 方に対し T 2 後、 的ないる 5 考 \$ 0 え てく て、 の雷 も同 す る 多 多い。そしてこうしたぇすることは容易である。なと、この小数者として難に含まれている。 ある。共産的的なありた。 人 方 民 を 8 0 T は立の理主場が窟 の理の 棄 マを 権 2 スコミ して 提 出さ をリ のも政 5 それる 多 治 WO 主権 0 大杉 理窟 () T を \$ 方 名を一はいる 一はいか TI 社 0 0 5 2 会 議員 七 これを れるこ ず 0 あ L 候補者 B () 批判 方 5 VC 6 0 判 L な 委 的た 任し 社会的 剣な 精 < 神 国会の出め政治 当 りが 場 だ的 的 含 あ 6

る 0 民主 プか界 3 治戦 主権者と 0 を行 0 工主義を加とあれ 常識化 狗 元不者はと 0 通 ボ Ü 3 T ス ての から 政 い 光者に 現体制 で に早主あない的る ゆ に僚 入れ結 財ら話で 維 がすら 持の 界なく L 表 べて 農 75 T 党 民が " \$ < き 行明 0 7 良 ' 今は 0 なな りいあ 宣仮の 5 0 る かの 文句や世者だか 自民が のだ 0 候補者を選 政 VC 党が勝 0 治 は議 下 7 1 層 ス \$ 会 通じて 0 出 7 労 0 たで しきで 農民 働 0 での知識者独裁 場で ら農機 来ると は \$ 大衆職 75 0 業政治 カンレン 具 苦し 0 5 TI 込 どの そ これ のか めて み屋 L 共 借 から を T 地方 代表 ロッ 金や不 す 者 3 + 人民 作の は るウ 1 ド、児の 主権 者 的 顔 F. が駈 0 TI 意 E 引 児 者 志 たんだま 玉、 人を で通 T 政に出 議会 \$ いて 3 っで

慮 3 から よう VC 0 現 でな 伝 ら民衆は世紀の え、 6 0 権利 る を維持 沈黙の中に閉じこもり、 \subseteq すること 0 できる そした

(1)

ま 3 わ ってい 年 3 は世界中の石油 から 見される石油 だ。 がた 0 埋 一蔵量よ らなくなるとさ 0 \$ 消 費量が 上 T

なぎの なけれ やデパ 汚染し動 のため 朝日新聞 消 0 費量の 0 自 ば ・三%にすぎない ならない 1 0 動 車の沿 植物に によれ 九 7 V ・一%を使 店のけば に害を及ぼ 濫、 理由は ば、 世界 過 生……そ ない 剰 2 日 ・・・・そん 暖房、 してま たと 本が人 。自衛隊や機動 い照明 V 七六 なも 50 消費を E O E で、石油を のは不 年度 . 大気、土壌、海洋 あく 煽るネ K なき利 隊、珠 大量に 要 は 世界 世界 であ オン る。 潤追 サイ 数 使わ の陸 0 0

性だけ強調 ン燃料の入手、廃棄物 ~、石油 は勝手な話 W きな問 V T するの ヨッ 時 tt だ。石炭が ク後は一転して節約時 消 心だから は、 0 費は \$ 微視的 0 知 ためだ 美徳と であ 処理、償却後の 恵がな る。 とい んから石 煽った VI たとえば、廃棄物 わざるをえ 0 子 油、石 代 コ マー プラン 力は 省エネル な 運 油 V も不 15 転 + IJ 0 ギー は ウラ 安だ ズム 処 理

> した自 権的 地熱 るプラントのある所 発が可能であ 大き T に供給する。また立地条件に応じて、風力、天然 もうけにならないから実現できないのだ。生産を社会化るから実現できないという。然り、資本主義社会では、それよりも太陽熱を利用すべきである。コスト高にな いろんな汚物や残滓 いる な 、潮汐の干満などを利用して発電できる。これ な汚染をまね は 治協同 電 ば して海溝に沈めると 力会社 すと かって学者 る。製鉄所や精油所など可燃ガ 社会では、 で ないたこと は わ では、ガ を投棄 考えようとし 0 下に埋没させる いり いる 創意工夫によるエネ を、人々 入してきた 「海洋の自浄作 カュ 。耐用 スター ないこと ケッ は忘れ ピンで発電して地域 ために、こん たのだろ である 用 い バスを発生す しを信 8 た発 IV # T 大気 Ħ 1 VC W は集 ハス、 8 Ü 5 b プ 0 開 カン 0 T

12

水も され H お T 本 いこなわれ かでは、い は 乱伐 。然り、資本主義社会だから、金もうけのたい、いまだに洪水と渇水のくりかえしになやま され、 ないのだ。 私有財 産制の物理 的な 壁の た 8 VC

ればいい。そして多目的ダムの建設や、改めて水力発電自衛隊を解体して、その機動力を治山治水事業にあて

である。とは全く次元を異にした、全人民のための事業となるのとは全く次元を異にした、全人民のための事業となるのの見なおしもできよう。ブルジョア共の日本列島改造論

(3)

消費はまさに浪費である。日 ら便箋や封筒が作られている。 リ紙 紙は文化のパロメ 心と相場が かきまって ノータとい いる が、アメリカ 本では再生紙はポ われる。だがとくに戦後の 6 は i 数 年 IV 前 紙 カュ 7

俗悪な雑 ばれ 売らん 0 すむであろう。だがそれでも、パル 時代になると予想する。 ている。われわれは、将来は 誌が消えれば かなの広告がなくなり、おびただし . 紙の消費量 マイクロ は現在 プ原木の供給難が の三分の フィ い参考書や N ム出 て

どうし 義社会でも、コスト 、あるいは他の材料に代えられないか。これ たら廃棄物を少なくできるか、また再利用 的 木材、プラスチックその に、このテー われ は、世界 ダウンの手段 マととりくむべきである 的な資源枯渇と公害を減ら 他の工業材料に としておこなわ は資 **してきる** n 本主 T すい

鉄はソ連・中国・朝鮮に、銅はアメリカ・中国・朝鮮という立場が、抜本的にこの解決をたすけるであろう。さらに、真に社会に有用な、そして必要なだけの生産

るようにならなけれ 1タリア・中国・ソ連 5 1 ッ 2必要な ソ連に、 と金属資源は地球に偏在 ばなら 要な所 ・チェ + な に、必要なだけ自 コに、ニッ・中国・ い ・中国 XX MI Qu ケル L 由に運 ている は 力 ナダ ば 0 2

(4

どん は瓶 生産 b H であ 社会化 ては引 VC 加 缶 れわれはマクシモフらがいったように、農工直結の る。 話 でも 送ることも 工して救急用に保存できる。また食糧難に 凍結乾燥、 によって 合わ 果物 ない で \$ できる。資本主義社会ではこれ から腐ら 解決 天日乾燥、粉末化、ジ できすぎれ できると信じてい せてしまう。勿体ない ば 値が下が 1) 3 Э. 0 んは不可 農作 ス化 運賃 話だ を な

る H 本 ルに書い 3 魚と二〇〇カイリの問題 が せる何 沿岸まで荒ら P では、昔 į 日 メリカ人は角 本 あとは捨ててしま の根拠 人は た。二〇〇カイリとい から魚が貴重な動物 鯛 や鮭 しまわっている \$ 心の中央部だけ切取って、 ない の頭 0 山脈が VC も汁に利用する。 つい 5 0 いう数字には、人々を納いては、先にもリベルテ 日本沿 タンパク源 多く酪農がむず ソ連も同様 岸や であ P 獣肉 になっ を骨ごと x かし ろう。 IJ 0 よう てしいい 力太

II

さん

0

僕は疑問である。それでその場合問題となる岩佐さん 国家論 さんに本当に天皇制を肯定する気持ちが 大綱」の 成立の事情を少し記し てみる。 あ った

綱」成 策研究所というのは山本勝之助さんが主宰していた亜細亜政策研究所より発行された。どうもこの亜細 。そしてこの山 『国家論大綱』は一九三七年(昭和十二年)二月 立 の過程が少しわかるのである。 本さん を通して岩佐さん 0 「国家論 亜政 九 5 大 L 日

の様に Ш 本 さんは 記 L てい 自身の著作『日本を亡ぼした る。 B 0 -の注 中3 To

ま U カン ス 「当時 た れ 0 た から わ 0 生活に る で た 。その当時中 た くし B ために働い 、この先輩をして日華親善の 暉、蔡元 は、 役 困 くしの先輩の旧 立た って の先輩が 国問題に 世 い てもらい た 培氏 るような仕事 ので、 らと 多大な関 カン いアメリカ帰 た 知 いと思い って中国に わたくしの 人 で 8 親和を ある 探し 心と情熱をも 友だち 渡り て欲し こと () 0 本欣 立体的 李石 を P かナらし 五郎 知 V と頼 に促 曾 2 2 何キ T

一人なの獣 き自由自 なまな も悲惨な戦争がおこなわれたことは、われわれ つづく たがって国境が われ だ。商 をとるなというのは、ナンセンスなエゴイズムである 焼、塩焼、煮付、酢あえ、ウニあえ、天プラ、フライ ている。獣肉を 製、スル をい われ て肉ダンゴにもする。イカひとつにしても、刺身 ましい から、地 業主義の そぐようになる。これ 肉をえるために何十段もの穀物が使わ 治 は、海洋の社会化を主張する。国家があり、 メ、ノシイカ、塩辛等々、実に多様な調 の共産社会しかない 0 球はますます破壊され、 あり、生産が社会化され 乱獲がわるいことは さぼり食り欧米人が、鯨を保 。資源の奪いあ を解消するには、権力な V 5 人類 ず無益 まで れている V は B から何 な競争 の記憶 滅亡へ な 理 い せよ を

0

できる。これ する 。その 南極の なく 一二か国 氷を砂漠に運んで灌漑に利用すれば、世氷がとければ、地球の三分の一は水没す なる。また食 を阻んでいるのは、 回のエゴイ ことが 糧の で きる ズムだ。国際的 天然冷 0 である 蔵庫に 国益のために占有を主 6 な協同作業だけ 利 用 するこ 没すると 界 2 0 飢 V \$

VC

0 から L

展させな 図 全面 それを は 的 0 林省三郎や軍当局に V VC かるに カン 理解してい VC つった 実 仲な を結ぶによしな か具体 。」「またその な らの人々は 的にわ カン 先輩の中国 った 0 た カュ 先輩 った 3 その先輩 7 i 、結局はわ 0 \$ の意 である わ VC たく 図する 対する の過去の たくし 0 i 方向 0 構 に進 0 想 0 0 K C 企 を

0 0 2 て、大きな飛 **かをお** 先生、岩佐作太郎老が民族観に於 んが よる の方法論に 大綱』の「刊 引 用 0 精神は私 事情がわ 岩佐さん 元文を読ん かれて さん 九年に書かれ 10 N 動作 3 の具体的誕生が 0 の満腔より賛 於いては未だ私との距離を覚えるが、老の居ると聞き幾度かの意見の交換の結果、運 躍 書籍は三冊あるのだが、おそらくそのうち かるであ をとげられ :太郎老が民族観に於いて、国・行の言葉」で「かってアナー を軍などに引 でもよく を心に決し 参照 文と前 た『日本を亡ぼした ろう。か わから できる書籍で岩佐さんに言及し に引用 憂国愛 た次第である。その共同意識 同する処のも この『国家論 き会せ ないか って山 玉 した文では 0 たということと、そ \$ 大精 本さん しれ 大綱 B 0 国家観に である 神に の」が ないが キスト 」である」 は 思 想の基とにかいる。国家 に若干 8 0 Ш で っと 本

> なし T いると思える。 T いるごとく見 える 3 至 0

都市 策謀 ぐ民間 を山 あ 位 0 T た た っと現実を見るようにというよう T 岩佐さんはそれら かの 所 カン 0 3 主義と政治家連の 置 は でなに う。こ 7 VC 000 本 緊迫してい 謂転 と思うの では を考え いる 右翼 さん ス 人々に会わせる。これ 岩佐さんに対する敬愛の心 あるまい 産 る人が好む策謀好な異のようなことをよ かを よう 0 に話す。当時山 党、農村青年社 0 てみると次のようになるのでは しめ 反日 だ。山 よう しなけ き上 な る。なにか な中で山 時 た カン 本的思想者を又朝鮮 現実観によ 吃引 3 本さん げる。僕は 。岩佐さん れば Ш は 終好きだった。そこれをしていた。いわれ 0 何 本 かけられ 本さ をし と打 「本さんは軍、右翼、大陸 はこれ 『国家大綱論 ·何百 らの会見は なけれ ち続く はこれに 0 2 N だ対 な批判 は岩佐 てかみ で軍とか国政に 人化 5 な 、そして生活 ばな 事件 上る う筋 かった。と 0 L 独立抗 念満と共 さんに 岩佐さ 「アナ 的 あ 石佐さんの無政が国政に近い何にで山本さんはこのようない。 わな 5 0 7 なことを言 あるまい 世 75 あ では の中の 争者を私 V 対 カュ \$ をはかそ i, VC VC + 2 国 た スト カン かくし \$ 7 0 0

国を累卵の

あ

憲法政治

V

る」と

た た。 VC で生活 身の農業社会か った 国家でなく、国 もか 岩佐さん ところによる \$ か、ということだと思う。思うにこれは岩佐さん V L して 5 L ば カン わらず岩佐さんは故郷に農民 L ~ ない いても きものであ ばあ の場合問題となるの ら受け る農村 と岩佐 が、そのことのもっと大きな 生活に困窮する家庭 さん 0 0 た影響の 姑息 たろ の故郷 50 な因 は ゆえではある は岩佐 なぜ国、 僕はそ 習に 生活を ではな 対 する さん から 国家、に拘 法律 送らな 理由は ま 反 V 一人 発が ようだ。 V カン 位 0 野心 あ 居候 カン 自 わ 0 0

の若 この理 底に民衆の活動力 は極めて読み変えの可能な半面を持ち、しかも戦争体制 岩佐さんは以後山本さん 窟のまさった論文のように思える。秋山さん 下の民衆に ---定し 時 V 時代 中4一 代 念は、極めて 1 < 0 「アナキストの「アナキストの」に対 ている。し から発酵し いやらし カン ら発酵していると見 心情ではあるま カン ら遊離した岩佐さんの さをみて政治 かし僕にいわせると『国家論 容易に岩佐の内部に、かなりに T いる と親 の転向」で「『国家論大綱』の 対 かに推 L しくし いか 秋山 0 的に書 量されるも たものは 「清さん ていな カン れ は 「国家改 い いようだ。 たも たずら 一反 が岩佐さん のである」 0 大綱」 逆の信 彼の な理 で根 良

> 器用 僕は その

小では

大綱』を引出してしめ

たと思いこう書いたのだと思う

れる。山

本さんはおそらく

岩佐さんの

家

的国家である

しまう。この文によって岩佐さんも転向者のごと

以後大部拘 ことも のおそ 岩佐さん て日 なけれ 5 泥 は 本 る < は 多分に して 「国家論大綱」を書き上げたことに のではあるまい ば カン 国家と な あ 5 たようだ。これ これ なく ったよう思われ い から う概念に なったとし か。し 利 L T は当然 免罪符 かし岩佐さ る。 泥 たら不幸なことだ L いのように 岩佐さん のこと んが わ 対 で 7 2 な あ は L 言 n 0 3 7

考えられる」としているが、むしろ政治的 あ 佐さんはアナキズムに触れる 7 Vi 僕は岩佐さんも日 実力 、民衆をふみ台にでも えら であ いる 転向の道程には、このような形容にふさわしい る、と批評すれば筆者のこじつけが過ぎるかも を鼓腹げきしょうせしむべき方途は、堯舜の道 棄した。そ n 岩佐の、無政府主義思想から に対する自覚が低いとき、平和な社会を ったと思う。秋山さんは「民衆が自己階級の 0 では たが、堯舜を選ぶ所に岩佐さんの自然指 あるま して革命 本のアナキズムの中では自然社会指向 た理由であったろうと思う。し い 頭望が カン するように 根 うちに野心とも をおろしたの 『国家論 して得る自己栄達 に堯舜 だと思 大綱 いらべきも 確 1 < 0 しれな のみで 向 0 間 立 カン して 革命 道は 5 加 道 25 6

0 そこに の代償となった部分と近代社会に対する反発、「自然 岩佐 た 0 n うことが てた。そして、この「自然に帰れ。必然に生きよ」 駆動力は岩佐さんを農民生活から社会革命運動へ 。必然に生きよ」という理由によると思う。この さんの革命願望は前 0 かまび は岩佐さんの政治指向があったことはい すし さんにお い、原 因を作ったのである。もちろ いて自然生成 述のように野心 的国家を生み、 ともいうべきも なめな

2

にそ ていく。 を語 があ かし論じれば論じるほど客観性において相違点を喪失し \$ 家と国と 家と国の違いがわからないけれども、僕は自然 まどいを与えてきていた。岩佐さんにも あった。自然生成的国家と国が似ていることは僕達にと 後半、何人か だと思うの 0 論 っている ずる本人の設定に帰依してしまりことが では 0 V まい 傾 そしてこのようなことの違いを論ずることは結 ない のあ 向はあり、『国家論大綱』にお VC 0 くつか のを僕 である。 なっているのである。僕に いまいさは岩佐さん と思う。 の人々が国と国家を区別して論じる必要 ないだけ は聞いたことがある。なるほ 僕はこれ でも違いはあ は岩佐さん が意識 的 は自然生成 国と国家の V ては におこ るだろう。し 0 しば 生成 0 玉 しばで な 家 ど国と い 的国 的国 区別 概 \$ 0 to 念

たの 知ら L 前 言 不 0 b 僕は『国家論大綱』は天皇制を支持 カン し本 H カュ れてきたが、本当に 勉強だから岩佐さん どうか 本 い 当に の政 0 でわか に岩佐さんが はわからない。『国家論大綱』を読めば戦 治 制度を言っているのであろうとは 5 な W 天皇制 岩佐さんが天皇制を支持して のである。 の天皇制に言及し を支持 戦前日 L した論文であると 7 本の歴 た他 いた の論文を 0 かは僕 わかる 史家や い

言があ 戦時中を乗り切ったのであろうか まに天皇制に 政治家の まうの 発言であった 本では事実であ た。これは僕達がいう天皇制は 中に日本には天皇制 で、岩佐さん ついて語ることを社会に対して禁句 ろうと思う。このような認識はあから り、それが は『国家論大綱』のように書 日本なのだという観点 という制度はないとい 0 度ではな とし カュ 3 う発 い 5 T T さ

Ⅲ 天皇制について

はそれ ような は『国家論大綱』で天皇制を肯定した、だから僕 だと思う。 治体制下 無政府主義は真実とか正義とかい ある。しかしそれを真実とか正義 世の 主性があまりになさすぎるでは は を肯定する、とい たらま Vi は 中 いろいろのも V と思う。岩佐さんの人がら、思想、性質、そ には で支持したり否定したりするのは個人の V いと思う。しかしそれにひっかけて岩佐さん ったく関係 岩佐さんの著るしいファン りような発想はよすべきだと思 OK ひか と言わ れ、岩佐さん ない ざるを得な という概念 う概念の中 か。天皇制 から いる を敬愛するの い。そ の中 で語るべき 0 自 を B して 由で 現政 50 天皇 は 語 0 る

天皇制を土俗とか民俗で語り、天皇制が空想をかき

to

えて それ る神 個人的に意見を言えるなら天皇は からこそ天皇は必要なのだという と思う。ある人は自立できない しまうのだ。僕は天皇は個人の自 たり、そん を愛すること、それも てるみやび、はなやか 度は不必要であるし、害でしかない 人は必ずいるか いると思う。天皇制 \$ 道、神社、八百万神、そうい カン まわない なも をとらえ、東洋的 ので一律に計られ もしれないが、個人を自 L 5 かまわない。又天皇制に代 かしそう はそ おだや の個 V 個 立の上に 50 人の たの うも とい W かもしれないが、僕は 人は必ず らな と思う では のを OK われる 自 立を V からの 立立させな 悪 V 0 いるの 対する敬 自 阻げ やに しつけ い影響を与 V. できな だ、 表され T な 0 0 5 W い 爱、 だる 7 n

- 8 -

化、合理化の進ん なぜ 僕達 天皇制とは関係がないが問題 也 人に らの傾向 空想する時 僕達にはあ の中にある自 変化させて はその るのか な だ社会で退行 然指 いく。 ぜ自 ような傾向 向の傾 。そして無政府 社会 一を空想し とし 0 的 向だろう。 個人を民 8 なければならな い 主義の 5 てしまうの 俗 べき自然指向 機械化、集約 とか 中 風 で将 俗を カュ V 0

まったがこの辺で終えておこう。

(注)

一、北日本出版社(1) 『幸徳・大杉・石川』秋山清・大沢正道共著、一九七

なかったように思える」と記している。さんは死ぬまで「アナーキズムの心情から、脱脚していさんは死ぬまで「アナーキズムの心情から、脱脚してい

| 山本勝之助著、一九七○、評論社| 山本勝之助著、一九七○、評論社| | 「日本を亡ぼしたもの』僕が見たものは復刻版である。

てあるからである)(引用文の出典はいちいち明記しない。右記の中にすべの『反逆の信条』秋山清著、一九七三、北冬書房

●海外だより

0 た ごとく記しましたが、これはヴェッチーニの誤まりでし 。この目録は廉価版で一五、〇〇〇リラ、タリッ 書は八、○○○リラです。 お b X 。前号でタリッ " オ VC 文献目 1録があ 3 ツォ カコ 0

レーニングは国際社会史研究所でバクーニン文献の編集めておく。サンティランについては前号参照。アーサー・※ 一九二○、三○年代の闘士や理論家の近況をまと

紹介 1 = () アウ にお リズ であ 載する予定である。 ルシア カリストのホセ・リバスはキブツに入り七二年に P 編集長である で 表 し、これは をスペイ 5 ム」があり、ガストン・ル 者、フェデリ î, n IV る 和 7 ン会議にダニエル・ゲランとともに 注目すべき論 グスト ける CN セ ムやアナキズムについ L づれ 生れ ンチン T 日 から いる。スペイ _ い 本 ン集産体の継続 ・スー 8 る。この書物に 0 無政府主義。日 七六年に独訳 しとは の水セ カ かな アナキ TO カコ ら刊行した りの年令 文とし い シー 気がつい 1 . ~1 ント ン革 え、「老人」とはとて ズム運動をおそらく タリア語訳第一巻が は され とする 七 命に参加し て「スエー 「アクラティ については 本アナキ が、彼 ヴァルは昨年七月に国 7 (若 ラ た。 たところだけ 0 1 いくかの は V 「キブツの ツはスペイ の大著 方 日 本でも たアナル デンの エス 0 本 ズム運動小史」を発 ~1 本誌に ・」誌に リ七二年にキブツ ロ「スペイ 著書 初 ポ なじみ 生活 公刊 \$ サ 近 ラ で 8 ンの ンジ 以上の く書 てまとめて 寄稿 こを発表 され " ス N 上際バク 深いガ 82 L ン革命 1 ンジカ 6 一九 てお スや 活 通 た を ()

気紙(月刊)で、今年で七四巻になる。本誌にも寄稿し※ 「インダストリアル・ワーカー」誌はIWWの機

四月号に読者からの手紙を一通掲載している。ているアーサー・モイゼがカットをよせることもあるが

のときに VC で 0 アー 亡く その 歌 名前がでてい なり デ ンに住ん を指揮しま ま 父、ウェイ ĩ たが、未亡人は今八四 でい チ ます。 + した。ウ ます。 プリ ン・ウ ンの 彼 * は 著書 N Ü デン 3 デ 2 -ウォ はI 才 は . E でデ 五〇 ブリ IV ラウ 代 の葬 _ 0 0 式 VC 初 I

フレッド・ホーン

ン会議組織委員 ムス 0 た。 ・ギョ 先述のバ 詳細は クー 会」であった。 4 ム気付の のところわか ニン会議 「七月三、 ~ らない 0 よびか 四日の国際パクー が、 け 連絡先は は 次 0 よう V エ 6 =

全 一九七六年 3 口 ッパのリベル 七月三-四日、ミハイ テー ル 団体と友 IV . 1º ~ 7 1 ニン

の近くで開催される。

去一〇〇年に

よせて国際会議が

F

2

リッ

ヒヘスイ

ス

この会議の目的は以下のごとし。

文喚。 11パクーニンの思想と関連してリベルテール思想の

性をつくりだすこと。
(2)毎日の労働において経験したことを討論する可能

(3)国際的な行動と労働および闘争の手段について新

イパーを送れたであろうに、残念に思う。

おく。 七 5 れて 六年春号に V ス 2 工 ない デン ところへ、スー デ 前 1 出の論文を発表した。 ッ 0 Ħ サ V 2 p ア 力 シーが N IJ ズムに サ 1 「アクラテ ッソンの つい 結論部を T は文 \$ 1 0 一一九 L 献 カン \$ 知 T

デモ 力的 織は 0 スエー 補強をめざしている。彼らの考えによると、 VC では まって社会正義へ進むであろう。むろん、 会民主主義を志向する労働 存在し クラシ なプロ F 独裁 L を及 デンの た目標 を 1 パ 75 な諸前提が欠けて -の拡充、経 知ら Ħ い。リバタリアン・ ほ 労働運動はマ 3 0 ンダの敵である。彼らは かし、議会外行動のため 的デモクラシ な 75 実現を現在 い V 。暴力を用 共産党 済 的デモクラシ ルクス主義 組 いる。そうこうするうち の立法府に期待している は という考えが徐々に、 合の中にも支持者を得 弱体で、 サンジ いる極左と極 現在 カリス ーによるそれ 0 には、経済的 2 プ 彼等は 0 両者 政治 右の 1 は暴 7 0 組 政 2 は 的

の主張がいつの日にか、打開 で、多数の意思によって支持された経済デモ であろら である。 この傾向は 。 この考えの主導者が 続く それ への平和な軌道 S が A 実情 である 0 サン クラシ 2 ^ 0 力 せ

中央組織と S ٤ A C は スー い V スエー うが中央権力という は言ってい デン 労働者中央組織の略称で る) 0 意味に理解す × ある。 き でな

ラン 詳 が目立 自自 ト・センター 論しており、イ 由女性 政治家につい 前号に少し紹介したスペインのムヘレ つつ。)について「フリーダム」誌が 」という組織がある。 4 て「ル・モンド IJ アには「フ エミニスト . リベル 女性に テ ス・ 関する 現 エス IJ N 代 二誌 プ 世 記 ~ V 界

※ リベルテール旅行 (三浦訳)

月 C N T 23 力 5 クロロ て、 スペイ 考え 世界に = わ な異った方向 お よび 25 ーア委員 n ンに ている。 はこの おけるアナル な V 日 会 これ て確保しつつある順調な発展 VC は、 理想が、 0 他の友 は今日 間での会合を促進するた ŋ 楽しい ベルテ シスト運 龍組 C N T 合 雰囲気の と協力 動 (全国労働 IV 旅行 VC 参 こを \$ 加 L L T

> る。合流を予想され 洞察をもたらす会合を持つことができるように望ん 論を促進したいと思う。 る未解決のままの、総体的関心ある諸問題 文化討論等 やはりパルセロナの専用の場所でのシネマ、 公園の常設音楽堂において演劇、音楽、書店、雑誌等々。 のすべ いろいろな異った方向の自然の一致と運動に てのリベル H っわ れ われ るすべての種目 テー は結局に ルのグループとの結合 お いてわれわ は、 パルセロ VC 対話、会議 つい n を妨 の主張 ナ T の大 1+ の討 で げ いる

他の 至ることである。こうしてわれわれはスペ的方法、生態学、一般文化・・・について びグループに呼びかける。 わ す n b べての諸国のONT れ の関心は、アナルコ に関係ある · # ンジカ す ~ ~ 1 建 IJ 7 の個人 > ズ 設的討論に なら 4 分析 びに

を得ることができると思う。るすべての傾向、心情およびいろいろな観点の間の協力したがって、われわれは、われわれの国際活動におけ

るため われ カ をもち、われわれ 織におよぼして また、われわれ もらい の目的 0 行事が た を諸君 い い っこれ たる所で知られ 0 国の は 他のリ 最 大の

健康とアナルシーノ

さらに詳細について知りたい場合は ス)気付リベルテール旅行のための委員会。 CNT演劇組合(シンジカト・デ・エスペクタクロ

☆梅雨にはいりましてなんとなく毎日りっとりしいお天

気で困りますね

(編・梅田順子)

波万

ねらい 出処に入る者は悉く変性す衆議院の建物を見上ぐるなかれ 議会の心 この 理を知らずして 0 0 怖るべく且つ醜き

良心と徳と理性との平衡を失わずして ひとたびこの門を跨げば 最も醜き彼等駄獣の群にわれらの血と汗、われらの自由と幸福は 人は此処に在り難し…… 葉の如く踏みにじらる

謝野晶子の詩集「舞ごろも」(大正五年 」(大正五年)の中の彼等=代議士共のこと 安達幸吉さんより

> 先日、母はお茶の水の順天堂で白梅会の総会がありま よく来た、よく来たと云っているように私には思えま 少し色が赤くなって来ているような気が致しまし 父の頭の骨にも面会出来まして丁度七回忌に で会場までゆきました。 お元気でいらっしゃいま して私の息子達二人につりさがりながらやっとのこと す カン なります たが

さい 今、山鹿文庫の本箱の中に飾ってあります。そのうち らつっています。 した。順天堂の先生がその為、カラー写真をとって下 まして母の作った千羽鶴を首にかけてとてもよく ししてお送り致します。

☆「リベルテー あいの(山鹿泰二さんの長女)

ル」8巻7号拝受

た。ぼつぼつよい文献を読むつもりです。 三浦さんに 皆さまのご健勝を祈ります。 紹介されアナーキズムの重要さを知りまし (関正さんより)

☆「リベルテール」88号・89号を拝読しました。

遠出をして帰ってきては、またぶらぶら出かけていま したので、お礼をもうし上げるのがおくれました。

☆浅草の会に於ては失礼致しました。且つ又、無政府 たちだったんでしょうね。 ります。・ ります。台湾問題が今后の課題の由楽しみに致して居 懐かしいクロポトキンの名を発見し嬉しいかぎり 義誌を戴き厚く御礼申し上げます。 るのですね。 います。三浦さんは不思議なリズムの文をお書きにな のにびっくりしています。人間そのものがやさしい人 ませていただき、一つでもまなびとりたいと思って 8号の表紙の写真、みんなヤサオト (市川賢さんより (高木護さんより) であ コな 主 -

☆暑中お見舞い申し上げます。 の活躍を陰ながら祈る。「江川さん」の会の はしもと・よしはる、江藤さん等によろしく。 院に居るのが情けない。Aへ一路。 人々 皆さん にも

これ せて 個の会と仮面の会の合同での会合では貴重なお話きか 真実の叫び、心 からもよろしくお願いします。 いただき、感謝してお いました。拝読させていただきました。 ル五月号送っていただき、どうもありがと から共鳴いたしました。 ります。 (平井貞二さんより)

麦舎 草川 洋 ・石渡秋さん ょ ()

> ☆小生就職先の小会社はホーマン経営の結果倒産の情況 食っています。そんな訳であれるしたい、これもしな です。小生入社以来つい先頃約一ヶ月経過したるも、 トンやっとという所で、何もお力になれず心苦しく思 りません。只今職のためなんでもござれ、バイトして く、よわります。もちろん休業補償あり心配は何もあ ヘルニアという奴はこのつゆ時じくじくと痛みは います。・・・・ ければ…最低の暮しをと考えてはいましてもすっトン (新明文さんより) げし

政 府 主 武試論 (4)

達

学校を作 行の納まらない者があったということと、日本人が私立 の数が 部省が入学と宿舎につき規則を作ったのは、(1)留日学生 に合わなくな つの原因があったと言う。即ち一九〇五年冬、日 漢民の記述によると、 多く、日 って学問によって利益をもくろみ、寄宿舎が間 「資料1」についての補足的記述 ったこと、 本人によれ (2)革命党の組織ができ、清 ば留学生の中には必ずし 留日学生集団帰国事件には二 (つづき) 本の文 品品

憲に 0 T いた康 はこの 日 L 75 VC があ , 対 0 だ L 今、党が成立し機関誌民報 有為、梁啓超の保皇(清朝皇帝事件を境にして、留日学生の間 カン 信 の革命派(孫 0 たと* 仰をも 6 0 6 むしろここで運 たなくなったことである。 *9 は日本 7 いる。し う一団 な () と、退学帰国は カン し筆者が重要 動

な カン 1 精衛 ところ けて炸薬の調合と試 VC 力 、その効果は思わ L かし 的意図があったのかは資料 で帰国した師復が一九〇七年 同 兆 彼の人間関係として記述されて 、サイゴン、ハノイ 盟会に 銘 を宣伝すると共に資 口の役等、) 朱 の役、恵州 0 下 入会した仲間 信、 此作実験 VC しくなかっ 蜂起と小 革 の役 自 を 繰返 由 を巡歴し、南洋諸 想が であ た。 等は ぜり合 金を 1 L 南関 からではよく判 浸透 る。 すべ てい から 調 の役 漢民が 達 いを繰返 っ一九〇八 いる て留日 る Ĩ, な 間 お孫 VC. 0 あ 文はシ 胡 島 げる して 城 0 どんに の役 の華 漢な 揮 2

テロ 官李準襲撃未遂の外に、汪兆銘は 「私は 殺を企てい に通じるも 外へ奔走したとし 35 IJ てどう ん。私 持てません。運動が螺旋を描いて進むなど考えら のない 事 ズム て、 は軍事に 情 たゞ自分 のがある 80 た。その論理は圧が B どうし なると の計 を 画策され 観 察し です は不慣れ 画は最終点であ て人心 で い て、その効果は甚だ少 。がこれらの蜂起の反面 参加した師復とその仲間の戦線離脱 うのでしょ て、兄(胡 選択するだけです。 T ら離れる趣向は、香軍を指 兄は軍事行動を で結婚した滔天には い ですが を奮 って、万骨枯る> たのであ が切にあて 犠牲になる覚悟はできて 起すこ 5 りまして、疑義をはさ 漢民のこと)の 清の摂政王、載 か?へその 。しかしヨ って、師復の とが 主張し た文面 T Ł る。これは 4 差が アナ で 文は台 では 0 L きまし ために ますが 詩 1 にみえ 烈な よ 海軍長 うな 3 個 揮 を 丰 D 3 い して " 3 惠 人 1 賦 0 行)海 r 的 0 18 は n 自 暗 L る む

き日 0 ことは 京 7 の汪 政 を殺 府 は答え するな 0 度思 首 した 班 カン **へている。** 7 す運動 E カン なといい とどまらせよりと汪に書面 と言 さめた H を 本の は って、ねずみの首に して居り、 必ず と言う。 力 イライ政権を 返滅する カュ これに なりの のだ 担 対 殉ずる 成 カュ を ĩ, 5 果が 送り 当し た若 後年 よう 君が あが

を作 こと その 釜の 0 方は こです。 の作 0 光 革命党員には二つの T は 大衆に 一用は同 歷 煮たきされ 然 別なのは釜です です 飽 食さ から やが 世 な てその苦痛は激しい。この二つの ます 途があり V 。その一つへ釜 T 0 。薪はくべられていがあります。一つい 10 灰燼に 帰します。ところで 0 方)は 火 は VC 薪 なる VC なる 8

どの 0 で 汪 の事件 確 三六二頁 どうか判 ば で 5 る が あ 6 75 あろう。 テロ P る。な も未遂に終 筆者が引 ナ らな)とあ IJ お文献 キ主 ズ V 4 24 る。こ 1) 想にこ 義 用 0 者呉敬 (中国 したの 領袖 テ 彼は北京の獄中 感 2 を U n で彼が の外 は、 \$ 恆 政治思想史 の孫文はテ ズムに傾斜 0 ていた 張継 影 師復の近辺 響が 無政 大きか 府主義 汪 D カコ VC VC して 精衛 楊幼 を 0 の人 ながれ いたこ 者にな 等は自 3 0 烟著) 達れた 次ぎ た た _

> よう をもって と胡が記し い

値が 者に の謬見 条件 4 その 進行 岳、林冠慈(同盟会員)が 1+ 0 V で は 分 だ T ス カン テ 力 3 n た」と語ったと言う。それで n 不 た P あ 0 ば 7 VC から B D IJ 元に属するが 一つにあ 相応 めわ ズム った ない 活 ナ は 殺は当時の革命 VC 0 悪 ば テ だ。 が党 を み、敵 な損 心 た は 站 0 D 0 + だ。 \$ な VC 同 P ス たっだから げる 革命 の良 す者 盟 + 1 事実である 、またその気質をもつ者が ま た論調か 会員 達 0 V のは、当 い人で 頭 T 運動の推進は事情に 0 0 た敵の勢 + えた。 の時 ズム 目 声 甲や乙を取 を 接 失敗し、 これに 5 運 行 0 テ で 代 8 L アロリズムを無政府失敗し、林は爆死し かせることない 力が の行 動の 二八八 時、 でも っつけ を ~ w 李準をね 当たるに 限り、 破壊し ても る 動 主 修 洋 换 すると、敵と えた るとし 流に 正し 七〇年 であ 0 わ 東西を 不明 く、実行 合わ つく 方の テ 0 な カュ 0 T 死し、陳 革命 は ても 代 5 て、 0 た。 のフ 無政 問 府 せる あま と言 され 主義 VC 心 わ そ 0 わ あるの こって、 E 社) ラ 府 ず 0 陳 T 的 陳敬 サン主義者の 2 師 0 い値 時復 75 は 75

また孫文はその演説筆記書「三民主義」で興味深い ついての見方をしてい る。即 ち、

非常な文明的民族である。近来、欧州で盛んに新 法律が ど、すべてこれらはわが中国では幾千年も前からある古 義だし、列子の説いた胥氏の国で「そこでは君主が 平天国の 最近ロシアであったのは、その実、純粋な共産主義 も知れ で最新のものだとする。あにはからん、欧州では最新か の古い学説を詳細に考究せずに、この種の学説が、 主義でなくてなんだろうか? わが中国の新青年は 完全に たの 民蜂 共産主義である。 なく、マルクス主義である。マルクス主義は共産主義で ものだ。たとえば、黄帝や老子の政治学説は無政府主 てもてはやされている無政府主義、それに共産主義な であ 0 んが、中国ではすでに幾千年もたったものなのだ。 なく、自然があるだけだ」というのなど、無政府 実行 プルー れ四億の中国人は、非常に平和な民族であり したものはな 八六八年まで続いた ― 訳註)に既に実行したものはない。中国では洪秀全の時代(太める。共産主義は外国では言論だけで未だになる。共産主義は外国では言論だけで未だに では 施した経済制度は共 である。 いた 」(三民主義 (この項 、三民書 世界 中国 なく、 では

> ▽「台湾の政治犯を救う会」が七月二四日(1じ、 会館)に正式に発足する。設立総会とひき続き開 における人権抑圧の現状、台湾語聖書没収事件、キリス 入会および資料を希望の方は、救り会へ東京都新宿区須 「台湾の政治犯救援を訴える市民集会」にむけて、台湾 教長老会(二十万人)の闘い、米フレーザー委での台 問題公聴会などをまとめた資料が準備されています。 町四アジアマンション二〇五号)まで連絡を。 びかけ>

かれる

月 31 『獄中 -日に逮捕され 旭町2-円。発行 から・江川 12 ・戦争抵抗者インター日本江川允通 — 監獄法秩序粉 レッ 7 l 2WRI大阪)。これ 以来保 釈の条件が 整っ は昭和 部砕 T にいるにもか (大阪市あ 10

れている「山の秘密印刷所」である箱根・大平台の林泉

断頭台に消えた命日に、神崎清の『革命伝説』で書か

▽「愚童を偲ぶ会」が来年一月二四日、大逆事件

に連座

L

で開

かれる。連絡先は、

「愚童を偲ぶ会」準備会

一(東

四階白井気付

都文京区後楽ニー七ー五シライビル

がある。WRI大阪で取 外 日 領地 区立 々体 わらず にいる者が現状を正しく理解し、監獄法秩序粉 なぜ、そし という>日 VC 0 ちあがるよう訴えている。なお江川 験 」の中で獄中者が受けている苦痛を、正にそれを して いては、パンフ 五 て、いかに不当か!」を解明 いる人 治 本国の法律が通用しない場所=旧日本帝 を編んだも 」な意図で拘留され続けている江川 として分析し、このような苦 扱 『あるフレ の。この中で江川さんは、 いっている 1 4 7 ッ さんのえん し、さらに プ」へ 砕の闘 $\overline{\wedge}$ 痛 200 円 罪 獄 から 围 監 3

△同人誌>

況に対応した新しい理論構築をと目ざして始めた仕事で ぐる考察二、三(香港、『マイナス8』)、風景に ▽『黒の手帖』第二二号(七七年六月 った 大沢正 容は、金井新作論(秋山 態だ。進んでいるのは状況だけである」という。 九六六年一一月創刊以来十年余りたった、「新しい状 川三四郎著作集』の編さんに から (一八九三年、ランダウアー)、毛沢東の死 、予想通り、この仕事はいまだに目鼻も はここ二、三年休 道氏は、今年の秋 菅田正 昭 清 刊することになった。 から青土社から刊 , 「伊勢」 「没入」するため ドイツに の細 信仰と天皇制 おける 行される『 集後記に 社 お 0 会民な ang をめ 編者 かね 0 黒

> 大沢正 道

どの 常性の変革(岩鬼正美)、科学を撃て!(高井卓志)な 小論文と詩、 〇平井文化2F 』第五号(七七年六月、 小説の類。 持原気付、二〇〇円)。内容は、持原気付、二〇〇円)。内容は、 B

にふれる小論(水原博子)、女解放の為の参考文献年表 小笹四-二〇-二〇河野方)。 アメリカインディアン 無名通信』42号(七七年六月、季刊、福岡市中央区 (利根川典子 おもな内容は、ヴ I ユ

<月刊ミニコミ>

のあ た カュ のつながりを記した「東山 のピラル レ」と、三里塚の小泉英雄さんの手紙、坂志岡団結 日本反政治詩集」に収められた境中(東山薫)の詩「ア のものでも て闘 自 『遊擊』77号(七七年六月、 は らゆる 22 権力に 「……東山さんは文字通り人形のように撃ち殺され 直毘荘仁号長谷川修児)「東山薫追悼特集 などとい 私達は東山と闘い T は V っきりとおさえておく。東山 無念さをもって東山 とって民 ない東山薫ただひとりのものだ。そこの所を こう。 ったことをゆめゆめお 氏衆はター 私たちの闘 抜く 薫さんへ」(長谷川修児)ほ ゲットにすぎない。それら 東京 V さんは死ん ∞をはさんで東山さんと は報復 · 小金井市中 かすまい 戦 さんの死 だ。 で は それ な を 町31 い は誰 小屋 かかか

痛切に思 0 0 いも報復戦ではない は運動の 東山さんの生を守りきれ つく 全 0 7 を あ くことが必要だ らた 83 て見 75 0

体協会、 0 五月二三日、 松緑神道 目 会、青年文化研究会、 0 一助となること ふる 的は 0 光 な、より広がり 大倭紫陽花 大和山 協会内 さと運動、 「日本各地に散在 0 交換 大倭紫陽花邑に十 I VC と交流 六月号(東京 弥栄之郷 あると 专 をもった共同体 8 を盛 する 共 W 共 30 2 W 寒学園 C 同 5 VC 団団 する 体 同 体 新 参 体 体 話 西委員会、 四〇名が 加団 ことに の関係 運動の推進のため X コ 合 市 3 体 V 2 は、 者が t 0 岸 報告 日本協 会、みど 参 0 V て、よ 加 河 百 燈園 会会 堂に 協同 原

案内

ほ 日日 本エスペラント 九〇 (一九三二年 〇円 な ア文学運動など 学事 ベル 100 行 主義 0 始 円 復 0 刻版 伊井迂 IV 内江藤 込みは 前の左 (伊東三郎 解説 0 ま で。エ I 理 想閣 る ス 小 方に ~ 田 ラ 一スペ 切秀) 氏 (振



はのいな五際かし運で意 な呼るお・は いび。シ四言暴いで恩でウら 。か自 | 運論動る逮 秦竹由ル動、は。捕をる 皇は共で以集黒あ者記 △産紹来会いのが念本△ナ とるはマレニはりの中主介のの集事出し は封国義しも自団件たたで九 反ル註ン 主本し建は小たの由にはの花は八V 義当な社も組李でをよ今だ環一四 言し社でスで 共よはて会 揚五のと四年さ年で報 。 I のっでst 光動あ言組抗た とる人主戦 ロの 7号 言ので義線レレ望てな ッ手 解とつわの議事五 °かキ紙りだあにはか | み帰く 放呼たれ仕集件日年が

LOぱーて業会に北しき「 Be訴れ九いで風対京かた70 はこえて一るあ景すのな a. がい九がっをる天い7代 でる年、た報抗安とは戦 °の実と告議門のG

The Two-faced Bandit/from Kim Chi Na's The 5 th rights (金芝河 五賊のうち 2つの顔の意光) 24WIN April 28 & May 5, 1977

ナル ス 国際連合第三回大会

IV

VC

い

T

\$

たらす問

題

VC

直面する能力をもっ

進 員

君

7 る VC って 慰 接 0 とす 寄与す 安 < 間 最 N V を表 搾取 V n 後 3 ス to VC べされ 現 る 1 人 歴 た = 諸 to 5 5 史 弾 る 君 VC. 的 圧 だ VC VC 1+ to 感謝 使 3 1+ 0 れの とく 0 L in 命 î 三三 て、 T 活 カン を \$ たいと思 \$ い 0 VC 動 るす を 大 0 で 0 たすべ なく P 援助 + した 会 T 5 \$ カン N 0 的 0 玉 V 读 L \$ 家 同 1) ズ 急革の ٤ 時 会 4 資 便 0 命 0 がに VC 解 本 単 宜 P 的 放 主 な Ľ 思 世を V

義

0

界 は T

る

決に知のか

いべ 行 大会組 告 際 h VC る 会 0 ٤ L 連合連絡委員 を 遂 T おこな アナ は L 行 織お た さる V アはた IV 5 C よび 5 シベ で 果的 # ス 末 あ 全面的 会の 準備 ト活動 新 る 5 略 持続的 は L おい月 に移行 4 準 よ任初 U 一備委員 な組 O 務 8 する。 R VC IJ 0 ~ 観点 織・ 開 Ι 会は F カン 連帯 n す A テ カン 50 19 ~ P 国 T IJ N 整合! 勢力の 一際情勢 • 0 0 ナ す 報告 C ル N ~ W B T 情 T 75 ス

0

22 号 サ A 18 事 サ 務局 日 ナ 一七 00

委員会に 代 り準

メン

ま た

た 33 す

P

V 4 0

7

V

お 連

ょ

良

自

IJ

IV

IV

お

U

IJ

~

IV

V

2

TE

から V

2

n

ま \cup な ~

DI

上化 X 的 1 望 杨

不 1 加

可 的 ^

レ問な発ッ

紙

0

テ テ

+

スト

・を訳出

して

もら テ

す

で 力 でにリ

いル

P

v

ス

た 6

to

す

~

T

J ス

ラ 1

V

英語

ス

~

1

ン

語

お

ょ

TS

1

N た

Ħ V サ

IJ 0

ア語

ス語、

O K

大の 世界

VC

て

来 VC 7

た

明確

帯

参

コ

3 宣

0 0 ナ \$

T V ズ

国 開 0

お

け

3

IJ

N

テ 希

思想の

世界ア 提する

N 0

V

4 る

拠

点

~

VC

IV

テ

C

R

I

4 F

7

私書

箱第

1 潮

1

7

1) 信

*

ルで

L

た

通

次

0

宛

先に

送ら

ħ

た

い。

で

であ

IV

展

とよ

VC ス

ح

0 V

NKH

満 る

5 IJ

to ~

展

伝 望

Wall Posters in Peking

News papers of July 20th, 1977 report that Wall Posters in Pekin indicated Teng Hsiao-ping has been reinstated in all posts he once held.

I have ever written (Libertaire Vol. 7, No. 5 - April 1976, both in English and French) that Tien An Men Square riot (April 5th, 1976 tells us that the place of Mao and the future of his great culture revolution are not at all firm; the leaders of the actual communist party are already those of bureaucrats; no government cannot maintain without bureaucrats; and the revolution by means of power is nothing but a myth.

After the death of Chou En-lai (January 1976), Hua Kuo-feng came to power next month as acting premier. Teng Hsiao-ping lost his position again (April 1976). Mao Tse-tung died in September 1976. And now Teng is reported to have been reinstated.

When Mao came to power again in August 1966 through his great cultural revolution, he removed high officials including Liu Shaochi and Teng Hsiao-ping. But he could not expell Chou En-lai, if he did it, he couldn't have maintained his government. Without bureaucrats, no government can exist. Chou reinstated Teng as Vice premier but Teng could not succeed Chou when he died and was routed. However, now the plans of Chou are going on. Hua Kuofeng is on the way to reinstate Teng and then Liu Shao-chi too, will be in stage again.

Under the ancien régime of China, there were 80% of peasants and 20% of landlords, merchants, artisans, bureaucrats (intellectuals) and soldiers. Peasants were poor and illiterate and anarchistic instinctively who detest government, bureaucrats and soldier. Mao Tse-tung who came out of peasant, is said to have ever been an anarchist. To come to the power means to make compromise with bureaucrats. The last effort of Mao was the rejection of cunfucianisme which has been the moral of the Chinese bureaucracy.

Whither goes the communist China? Development of industry as Soviet Russia did? Liu Shao-chi and Teng Hsiao-ping had ever been banished as pro soviet sympathies by Mao. Agricultural improvement by peasants themselves as Mao encouraged? This should be done first of all to feed the great population of China. But bureaucrats would like to establish a modern State ranking with the World Powers.

Augustin S. MIURA